

「底が突き抜けた」時代の歩き方 289

「リメンバー・パール・ハーバー」を突きつけられた日本が、
掘り起こさなくてはならぬ未来への記憶

映画『パール・ハーバー』を観た井尻千男が、『週刊新潮』(01・7・19)の連載コラムの中で「アンフェア」だと怒り、呆れたのは、日本側がどうして真珠湾を攻撃せざるをえなかったのか、が全く描写されていなかったからだ。

《実は、日本政府の最後通告(宣戦布告)は攻撃の30分前に米国政府に手交されるはずだったが、大使館員らの職務怠慢によって、攻撃開始時刻から55分遅れてしまった。だから、われわれ日本人としてはアンフェアな騙し討ちという非難を甘受せねばならない。

しかしながら、フェアネスを重んじるのであれば、コーデル・ハル米国务長官が日本に突き付けた「ハル・ノート」の存在ぐらいは明示しなければならない。このノート(覚書)のことは当時アメリカの一般国民には知らされていなかったとはいえ、60年後の映画製作に当たって無視するというのはアンフェアだ。ルーズベルト大統領が登場する場面があるのだから、ハル国务長官との会話の一カットを入れて、「きょう(1941年11月26日)日本政府にあの覚書を手交しました」ぐらいのことはいわせるべきである。内容についてはナレーションでも結構だ。

とにかくこの覚書は当時の国際常識を無視した無理難題を並べたもので、のちに米国議会ですら問題になるいわくつきの文書だった。その内容は次のようなものだ。日本軍は中国大陸および仏領インドシナから即時全面撤兵せよ 汪兆銘政権(親日派)を否認せよ 満州国を否認せよ 日独伊の三国同盟を死文化せよ。

いってみれば、などは日清・日露の両戦役で得た日本の権益(国際法で認められていた)をすべて放棄せよというに等しい。念のためにいうが、仏印への進駐はフランスのピシー政府との取り決めによる。に関しては、米政府がすでにして公然と蒋介石政権に軍事援助をしていることの証拠のようなものだ。事実、米空軍の志願兵で構成される援蒋部隊フライング・タイガーは、日本軍の真珠湾攻撃にさきだつて大陸の日本軍を攻撃している。の要求は主権国家の尊厳を否定するに等しいものだ。

さて、ルーズベルト大統領の政敵と目されていた下院議員のH・フィッシュ氏は大統領の対日宣戦に熱烈な支持を送るのだが、後日、「ハル・ノート」の内容を知るに及んで次のようにいうのである。「日本には自殺するか、降伏するか、さもなくば戦うかの選択しか残されていなかっただろう」と。そして彼はハル・ノートを「恥ずべき最後通

牒」と呼び、大統領と国務長官を糾弾したのである。》

《製作者、脚本家、監督らが「ハル・ノート」のことを知らないはずがない。知りながら知らぬ振りをしているとしか思えない。あるいはまた19世紀半ば以降のアメリカが西へ西へと勢力を拡大することを「マニフェスト・デスティニー」(明白なる天意)としたことを知らぬはずもない。ハワイ王朝を併呑^{へいどん}し、フィリピンを領有した直後に、日露戦争に勝利した日本が、その「明白なる天意」の前に立ちはだかった。そのころから密かに対日作戦の「オレンジ計画」が練られ始める。

その日本が旧宗主国イギリスと「日英同盟」を結んでいるのだからたまらない。したがってアメリカはこの天意の前に立ちはだかった日英同盟を廃棄させるべく画策する。それがウィルソン大統領説くところの「二国間同盟から多国間協調体制へ」という呼び掛けに隠されていたもうひとつの意図でもあった。かくして「日米の宿命の対決」は長い長い物語になる。もっといえばペリー艦隊の浦賀来航(1853年)も「マニフェスト・デスティニー」のごく初期の出来事だったのである。》

ここで最大に引っかかるのは、「製作者、脚本家、監督らが『ハル・ノート』のことを知らないはずがない。知りながら知らぬ振りをしているとしか思えない。」と指摘している点である。確かに彼らは「ハル・ノート」の存在を「知らないはずがない。知りながら知らぬ振りをしている」のだ。だが、それは何のためにそうするのか。吉本隆明がいうように、「太平洋戦争中の特攻とか真珠湾の奇襲攻撃が、今度と同じように、とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬようなやつらの攻撃」に仕立て上げるためであろう。井尻千男が日本軍の描き方が「暗いうえにグロテスク」といい、山根貞男が「日本軍人が揃ってしわくちゃの猿みたいな顔」と形容するのは、自分たちの理解を絶する存在として描写しようとしていたからだ。

つまり、こういうことである。アメリカから「ハル・ノート」を突きつけられなければ、日本軍の真珠湾攻撃は起こりえなかった。だから真珠湾攻撃は、アメリカの「ハル・ノート」の所為だなどといいたいわけではない。井尻千男も書いているように、アメリカにはアメリカの対日戦略があって、その必然性において「ハル・ノート」が日本に突きつけられただけのことなのだ。ここでいいたいののは、「ハル・ノート」によって追い詰められた日本が真珠湾攻撃に踏みだすに至るプロセスがあったという点である。そのプロセスを省略するなら、正真正銘日本は、「とんでもねえ迷妄で、野蛮で、わけのわからぬ、何を考えているかわからぬようなやつらの攻撃」、要するに、とんでもない悪玉になってしまう以外にない。映画『パール・ハーバー』が「ハル・ノート」の存在を伏せたまま、「グロテスク」で「揃ってしわくちゃの猿みたいな顔」の日本軍人が不意を突いて真珠湾を攻撃したように描くのは、アメリカ人にたぶんいまでも植え付けられている日本人に対するイメージ通りに即する必要があったからだ。

もし現在のアメリカ人が、どうして日本が真珠湾を攻撃せざるをえなくなるまで追い

詰められていったのかを全く考慮することもなく、降って湧いた災難のようにしかパール・ハーバーをみていなかったとすれば、今回の降って湧いた同時中枢テロからパール・ハーバーがアメリカ人のなかですぐに想起されることになるのは、あまりにも当然のことだ。いうまでもなく今回の同時中枢テロも、パール・ハーバーが降って湧いたものではなかったように、けっして降って湧いたものではありえなかった。すべて物事にはプロセスがあり、パール・ハーバーに「ハル・ノート」を含むプロセスがあったように、当然今回の同時中枢テロにもプロセスがあった。しかし、かつてのアメリカ政府が「ハル・ノート」を伏せたまま、パール・ハーバーを自らの正義に対する日本の不正義として、プロセスを省略した無知と偏見を自国民の頭上に大量にばらまいたのと同じことを、60年後のアメリカ政府もやっけてのけているのである。

今回のテロを契機に冷戦崩壊以降のアフガン情勢について少しでも学習したことのある者なら、米ソの意図によって蹂躪された冷戦時代に、生活空間の一切を破壊されたアフガンの人々が拠り所を求めたイスラームの勢力に、対ソ連の戦略上から政治化・軍事化の支援を与えたのがアメリカであったことを知らない筈がない。アメリカからかなりの援助を受けていたビン・ラディンやアルカイダが、冷戦時代のアメリカによって育てられたことはいまや常識である。追い詰められた日本は真珠湾を攻撃し、その60年後に追い詰められたビン・ラディンたちはアメリカの中枢を攻撃し、文字通り「窮鼠猫を噛んだ」のだ。追い詰められていったプロセスをみないようにするなら、戦前の日本もイスラームのテロリストも単なるクレイジーな存在でしかなくなってしまふ。

福田和也が慶応大学教授の阿川尚之を相手（『諸君！』01・12）に、《アメリカでは当初、パールハーバーとかカミカゼということが盛んにいわれ、正直、不愉快でした。／もちろんパールハーバーはやったけど、あれは相手が軍艦だろう、と。カミカゼ・アタックにしても、軍同士の戦闘行為としてやっているわけです。それをテロリズムと一緒にされてはかなわない。／もちろん全然違う位相の事件だとはわかっていますが、内意識としては、いつまでも消えないものなんです。／だから、感情的に一体にはなれない。／もちろん、ぼくにもアメリカ人の友人はいて、アメリカが原爆を落としたからお前は嫌いだ、とは思いませんけど、集団として個々に結びつくには50年というのは、まだ短いのかな、と思います。》と語ると、阿川尚之は《その論理からいうと、アメリカ人がパールハーバーのことをいつまでも憶えているのも理解できるわけですね。》と返答し、福田和也のほうも《それは当然だと思います。／一昨年、スミソニアン博物館がアメリカの学者やジャーナリストに20世紀最大の事件はなにかというアンケートをとったところ、一位がパールハーバーで三位が原爆でした。ぼくはホロコーストがぶっちぎりの一位だと思っていたら七位か八位でした。／それを見たとき、あれがアメリカ人にとっていかにショックだったかということを、日本人は忘れてはいけないと思いましたね。》と同調している。

パール・ハーバーなどは活字でしか知らない戦後生まれであるなら、事実の負い目から解放されており、もっと自由な見方を駆使できるであろうのに、辛口の福田和也でさえも、パール・ハーバーが「アメリカ人にとっていかにショックだったかということ、日本人は忘れてはいけなかった」といって、素直に受け取ってしまう始末である。20世紀最大の事件として、アメリカが一位にパール・ハーバーを持ってきて、それと比較することもできないぐらいに巨大な原爆投下問題を三位に持ってきたことの、アメリカの仕組まれた作為をどうして読み込もうとしないのか。パール・ハーバーが「アメリカ人にとっていかにショックだったかということ」ではなく、プロセスを知らないまま「ショック」であるようにアメリカ人は思い込まされつづけており、それこそ従順に戦後を生きているということなのだ。

なぜアメリカ政府が「ハル・ノート」の存在を伏せたまま、あたかも気狂いのような日本軍のカミカゼ特攻に真珠湾を奇襲攻撃されたという、一方的に被害者的なイメージを自国民の間に流布する必要があったのかといえば、それははっきりしている。戦争といえども人道上げっして許されない原爆投下に対する罪責感を覆い隠すためであろう。「あれがアメリカにとっていかにショックだったか」をいい続けることによってしか、原爆投下の測りしれない残虐さを隠蔽できないのだ。因みに、アメリカ側の被害は戦艦5隻と駆逐艦2隻を撃沈、戦艦1隻大破、航空機140機爆破、約80機損傷、2230人死亡、1145人の負傷、100人の民間人の死傷者、対する日本側の被害は未帰還機29機、特殊潜航艇5隻、戦死者64人だった。もちろん、日本側の被害と比較すると、アメリカの被害は大きいけれども、それでも21万人近くの死者を一瞬のうちに現出せしめた原爆とは較べるべくもない。

ベトナムを持ちだしてもいいが、アメリカが他国の領土で戦争を行なったどれ一つを取って比較しても、パール・ハーバーなどは大した被害でありうる筈がない。それなのに、「あれがアメリカ人にとっていかにショックだったか」といわんばかりに、事ある毎にパール・ハーバーを持ち出すのは、そう印象づけていつまでも相手の首根っこを押さえつづけていなければ、アメリカがこれまでやってきたことの桁違いの悪行との帳尻合わせがうまくいかなくなるからだ。一言でいえば、要するに、アメリカは自らにとって都合のよくない事実を押し隠して、相手の非道面ばかりを大きくクローズアップし、自らの正義を大上段に振りかざしているのである。東大助教授の佐藤俊樹が『中央公論』（01・12）の中で、今回のテロに関して、アメリカが「民主主義対テロリズム」という図式をこしらえて、「民主主義という正気を襲うテロリズムという狂気」というお札をはることで、すべてを消し去りたい、あるべきでない異世界からの侵入者にしたいかのよう》な気持ちに陥っているという指摘は、60年前のパール・ハーバーと全く同じ図式を浮かび上がらせている。

だから、アメリカ人が今回のテロについて、パール・ハーバーの60年後にもう一度、

今度は世界貿易センタービルとペンタゴンという金融と軍事の両中枢にパール・ハーバーが起こったと捉えるのは、彼らの一向に変わらぬ自分本位の記憶からすれば、あまりにも当然のことなのだ。しかしながら、60年前のパール・ハーバーが「ハル・ノート」によって追い詰められた日本のほかにどうすることもできない選択肢であったように、今回のテロもまた、《アメリカ国民ですらない人々を2千人もまきこんだ点で、疑問の余地なく虐殺であり犯罪であるが、まぎれもなく正気の世界に属している》が故に、「民主主義対テロリズム」という図式に収まりようがないのである。《飛行機の操縦訓練からはじめた計画性と最大限の視覚効果を実現した計算高さは、正気の産物以外ではありえない。》と、佐藤俊樹はいう。

《憎まれるアメリカというのは、日本ではすでにおなじみだ。それどころか、バブル崩壊後の「第二の敗戦」のなかで、日本もまた潜在的にアメリカを憎んでいる。》同時中枢テロを被るなかで、アメリカは自らがどれほど深く憎まれているかを思い知らされたにもかかわらず、いやそうだからこそ、「民主主義対テロリズム」という図式を捏造することによって、その憎しみを必死に忘れようとしている。と、同時にアメリカに従属している日本の、アメリカに対する憎しみも忘れられようとしていると彼は説く。《そこでは憎しみが二重に見えなくされている。アメリカが今必死で忘れようとしている憎しみだけではない。日本がアメリカに抱いている憎しみもまた、「連帯」や「国際貢献」の名の下で消し去られている。アメリカと日本がともに現実の自分を見まいとする中で、「新しい戦争」だけが着々と進んでいく。》

同時中枢テロが60年前のパール・ハーバーの記憶をアメリカ人たちに蘇らせ、「リメンバー・パール・ハーバー」の聲が彼らの間に湧き起こったそのとき、日本人が自分の胸中に問いかけるべきことは、「原爆を落とされて無条件降伏をさせられても(...) いまだにおどおどした敗者の羊であり続けなくてはならないのか」、60年を経過してもまだ受け入れてもらえないのかということではなかった筈だ。「リメンバー・パール・ハーバー」に対しては、その憎しみを等身大以上に巨大に膨らませて、「リメンバー・原爆」を消し去ろうとしているアメリカの不公正さに対する憎しみを引き起こすことであつた筈だ。佐藤俊樹もいうように、アメリカに従属しつづける日本はパール・ハーバーを合唱されることによって、ますます身を縮ませ、「アメリカに抱いている憎しみ」を封じ込め、ますます自分とは異なるアメリカの現実に同化させようとするのである。

《自爆テロは周到な計画性と強固な意志を要求する。その上、犯人自身には何の利得もたらさない》が故に、《本当に正しいかどうかは別にして、自爆テロは強烈な正義と理性の感覚を伝えてしまう。他の誰のものでもない、彼ら独自の正義と理性を。テロを目の当たりにする多数派^{マジョリティー}に対して、「自分たち」の正気とはちがう、別の正気が存在することを否応なしにつきつけるのだ。同時多発テロの真の衝撃力はそこにある。》にも

かかわらず、《それが見えなくされている。別の正気、別の正義の存在が消されている。》という佐藤俊樹の指摘は、アメリカ側のパール・ハーバーの合唱の中で、60年前の日本が味わったのと同じ図式を今回のテロも辿ろうとすることへの憎しみを、日本が掘り起こすべきであることを明確に浮き彫りにしている。

《その憎しみと暴力にアイデンティティを揺るがされたアメリカは、揺るがされたという事実を必死で消そうとしている。そして、他者に出会わないゲームのなかで他人の憎しみと自分の憎しみを見ないことで、日本は別の正義だけでなく、自分自身まで消し去ろうとしている。

自分がいない世界は究極の非現実である。虚構の、書き割りのなかで、すべてが進行している感じがするのも無理はない。》

少なくともパール・ハーバー以降の日本が辿った現実、アメリカによるプロデュースの下での「虚構の、書き割りのなかで、すべてが進行している」ものであったとしても、今回のテロによってアメリカによるプロデュースの下での虚構の現実が、どのような赤裸々で、生々しい、粗暴な、あるがままの現実を押し隠してきただけにすぎなかったかを、白日の下に晒してみせた。お負けに、日本に対してはパール・ハーバーの合唱が、もう一度60年前の当時の戦争の現実に戻り、深く考え直すきっかけを与えてくれたことは確かである。そう捉え直す人は極く少数であるとしても、だからこそ、若い佐藤俊樹の次の言葉は、戦後ボケの日本人に痛切に向けられなくてはならない。

《私たちが知らなければならないのは、自らを殺してまでなしとげたい正義がある、あらわにしたい憎しみがあるという事実である。そういう正義と憎しみによって今回の暴力は引き起こされた。力の行使への追従や絶対平和主義によって、それを見えなくしてもしかたがないだろう。別の正気があるというのは、逃げようのない、世界の属性なのだから。

憎しみに対する最もまずい処方箋は、憎しみをぶつけ返すことではない。憎しみを見ないようにすることである。他人の憎しみにしても、自分の憎しみにしても。憎しみを見る強さを、私たちはどこかに忘れてきていないだろうか。

憎しみと暴力を正面から受けとめる言葉。彼らの憎しみを彼ら自身の形で、私たちの憎しみを私たち自身のものとして、見せる言葉。戦後の日本に本当に欠けていたのは、テロ対策でも国際貢献でもなく、そういう言葉だと思う。今の日本に本当に欠けているのも、そういう言葉だと思う。》

2002年3月16日記